

「倭人伝」小考

山崎正之

旧臘、機会があつて湘南のH市中央公民館で市民大学講座の講師をつとめた。

与えられた課題は「日本古代国家の成立」といった歴史畑のものだったが、古代史研究の側からも未だ当分結論の出そうな気配のない問題なので、とても深入りはできない。

もっともシンプルな形で、「魏志倭人伝」の中で生活習俗を伝える部分を讀みながら、最初と推定される古代統一国家を形成したのであろう人々の情況を考えてみようとした。

それにしても、間違ふ感じは否めない。西晋の陳寿による記述は三世紀半ばのものであり、周辺諸外国に関する記事にしても直接彼自身の見聞ではないことである。い

つどのような方法で、どんな人たちから取材したのかについては、まったく分らない。ごく通りいっぺんにいえば、帯方郡使考えるのが順当だろう。

そもそも「倭人」の定義にしてからが、必ずしも統一されているとはいえないようだ。「倭国」という実態がないだけに、倭人と呼ばれる対象がどのような地理的範囲のなかで収まるのか、もつまびらかではないということになると、単純に日本人の祖先的位置を与えるのにも問題が残る。

中国人の方からの呼び名として「倭人」には、ある意味がこめられていた。それはいうまでもなく、中華思想にもとづく周囲を取巻く異民族に対する称呼、すなわち東

夷・南蛮・西戎・北狄のそれであるが、いずれもかんばしいものではない。

「倭人」は東夷に属する——「魏志倭人伝」とは通称であり、正式には「魏志・東夷伝・倭人条」——朝鮮半島を含む、現在の日本列島（おそらく九州島を先頭に考えるのだから）、本州はどういうことになるのか。邪馬台国近畿説の成立如何で違つて来ると思われる）の範囲を指しているが、いわゆる朝鮮民族とは一線を画すところもあつて、なかなか微妙である。

「倭」については、廻つて遠いさま、であるとか、みにくい、といった意味も伝えられており、一方で「倭人」は柔順な人だともいっている。

後晋の劉昫（八八七〜九四六）の著わした『旧唐書』で、倭国はその名称を嫌つて日本と改めた、と記すのは、おそらく事実認識での時間差があつたとしなければならぬだろう。このときの「倭国」そして倭人は、ほとんど日本であり日本人であつた。名称は同じ「倭」を用いていたにしても、倭人伝当時そのままであり得たはずはなからう。地理的にも、文化的にも、次第

に「日本」統一にむかった過程を十分に推測してよい。

問題は、同じ「倭」を称していた間に、何が残り何が失われ、そして何が新しく付加されたのか、それらを探ることによって私たちが祖先のイメージが幾らかでも取り出されて来るかも知れない……。

倭人伝の記述にみえる倭人の習俗の一つに「黥面文身」のことがある。入れ墨とはいっても、具体的にどのような状況のものであったのか、水人これは漁師で魚蛤を捕らえるのに際し、害をこうむらないため呪術的な意義を認めていたようだ。その点では、きわめて現実の効果を期待する行為であった。ところが次の記述になると、それは飾（かざり）となったといひ、また国により尊卑によつても文様に違いが見られたという。

中国人の目にうつつた倭人の入れ墨が、異様だったことから注目したのだから、その変遷にも興味を示して取材がなされ、やがて単なる飾（かざり）になったというのは、かなり肌理（きま）のこまかい観察だと思ふ。時間の経過がどれほどであったかは触れられていないが、文化の度合いがこの呪術性を薄め

て来た様子を知ることが出来る。

倭人伝のこの部分を読むと、私は「古事記」中巻冒頭の神武天皇条をもつて来たくなるのである。初代天皇に即位後、あらためて皇后を求められたとき臣下の大久米命を媒として、イスケヨリヒメに白羽の矢をたてる話が載っている。交渉に出むいた大久米命が目の周りに入れ墨をしていた、という。「黥ける利目」——解釈として、周辺に入れ墨をした鋭い目、それは大久米命にとつて特別な何かをあらわしたしるしであったのか。

大久米命の伝承は古い。記紀によれば、天孫降臨神話の際に高天原から地上へ降るニギノ命に対し、弓矢を持ち天孫ニギの護衛にあつたのがアメノオンヒノ命とアマツクメノ命であった。前者は大伴連の祖で後代の旅人、家持につながる。後者が久米直の祖という。つまり両者とも武人なのである。

なぜ大久米命は「黥ける利目」だったのだろうか。この入れ墨は目を大きく見せるための方法で、そうすることによって相手を威嚇し圧倒した、との説明がある。それ

が武人にとつての必備の条件だったとすれば、大伴系も黥ける利目でなければならなかったことになるだろう。しかしこの場合、あくまでも大久米命のそれが珍しい状態であるがゆえに、「など黥ける利目」と問われたのに違いなく、「あなたに会おうがためですよ」という彼の返事も、その場面に応じた機知的な即答と解すべきである。

神武天皇条の記事は、とうてい史実とみなせないのは当然として、そのすべてをフイクション（虚構）などといえるものではない。背景を支える習俗を見出し、そこに上代生活の様式があらたな内容を盛り込んでいる、と読んでいい。

ただ、倭人伝の入れ墨とストリートに結びつく、と断じられないのは、強ち五世紀にわたる間隔のせいばかりではないようだ。もう一つ、海人族（あま）からの転移の跡づけが残されており、わからないことが多すぎます、と私は頭を下げて引き下がらざるを得なかった。